

《研究ノート》

エドワード・ハーバート『自叙伝』（翻訳）

——（4）「大陸での武者修行，
そして嫉妬に狂う貴顕紳士による襲撃事件」——

山根正弘 訳

[訳者による前口上] 十七世紀イギリスの外交官にして詩人および哲学者・歴史家、さらにはリュート音楽にも精通するエドワード・ハーバート（チャーベリーのハーバート卿）による半生の続き。一五八三年、イングランドのシュロップシア州はアイトン・オン・セヴァーンの地で産声を上げた著者が、病弱な幼少期を過ごしたあと、十三歳でオクスフォード大学のユニヴァーシティ・コレッジに入学。在籍してほどなく厳父の訃報に接し、十六歳のとき、五歳年上の同族の女性と結婚。一六〇三年、即位したばかりのジェームズ一世よりバースの騎士^{ナイト}に叙任されると、それを足掛かりに父祖の郷里ウェールズはモントゴメリーの州長官や州選出の代議士となる。しかし、一六〇八年、二十五歳のとき、海外視察の夢を捨てきれず、妻子を残して冒険の旅に出る。最初に降り立った先は、フランスはフォーブール・サン＝ジェルマン。そこで出会ったヴァンタドゥール公爵夫人の伝手で名家モンモランシー家の知遇を得る。老元帥モンモランシー公爵の庇護のもと、風光明媚なシャンティイ近郊のメルルー [現メロ] で、馬術や剣術の手ほどきを受けるなど騎士としての素養を身に付ける。遍歴の騎士時代を過ごしたあと、本国の妻子の許に一旦は戻るものの、解き放たれた精神はイギリスの島嶼に収まるべくもなく、一六一〇年、二十七歳のとき、再び大陸へ旅立つ。今度は、ドイツ三十年戦争の前哨戦とも言うべきジュリアーズ（ドイツ名：ユーリヒ）攻囲に向け義勇兵として参加。そこで数々の武勲をたてる。ジュリアーズ降伏後も、しばらくは大陸を股にかけ武術の腕を磨き、戦術を学ぶ。このような次第で、ハーバート卿の場合、今回も物見遊山のグランド・ツアー如きものとは全く別物で、さながら武者修行となる。

その間における障目に値するエピソードとして、嫉妬に燃える貴顕紳士による流血事件が挿入される。眉目秀丽と自惚れるハーバート卿が、間夫だと誤解され、衆人の前で命を狙われる。高貴な夫人の寢室の闇で交わされる不貞行為を、鶉の目鷹の目で探る夫が、後の十九世紀半ばに創設される（旧）ロンドン警視庁本部スコットランド・ヤード界限で、白昼堂々と繰り抜ける刃傷沙汰だけに、なんとも皮肉である。

訳文中、諸々の括弧の使い方は、従前どおり。

なお、訳者が施した注の番号についても、その番号は前号より続く連番である。

この冬の間ずっと [一六一〇年] 一月の末頃まで、このようにして過ごした。ここ [パリ] では、記憶に残る特筆すべき事件はなかった。フランス王と [前] 王妃マルグリット、それに各宮廷の貴族や貴婦人に暇乞いをした。その時コンティ親王妃 [ルイズ＝マルグリット；ギーズ公アンリの娘でフランソワ・ド・ブルボン公爵の妻]

より、スカーフを英国まで持ち帰り、^{わらわ}妾からといってイギリスのアン王妃に贈り物を渡してほしい、と頼まれた。その件を承諾し、道連れに〔二代目〕サー・トマス・ルーシー（彼はフランスでふたりの同胞の騎士に対して二度決闘をしたことがある。その折、彼の介添人を務めたが、指定場所で敵方を待ち構えていたものの、横槍が入り果たせなかった）を選び、はるばるノルマンディーの港町ディエップまで行き、二月の初め頃だったか船に乗った。その時凄まじい嵐に襲われ、一晚中海の上で恐怖に慄いた。航海長は羅針盤が使えず、理性を失ってしまった。暴風雨ゆえにどこへ漂流しているのかも解らず、航海長が利用できる手だては稲妻だけだった。それも、その夜ひっきりなしに雷鳴が轟き、生きた心地がしなかったが、その閃光がイギリスの岸に向かっているのかどうか判別するのに役立った。航海長は何度も望遠鏡をのぞき込み、目的の岸に近づいていると判断した。さて、明け方近く神のお導きにより白亜の断崖が視界に入り、その方向に針路を取った。ドーヴァーの人々は朝早めに起き、船が波間を漂い流れ着くのを心待ちに、大勢が岸壁に集まっていた。昨夜の^{おおしげ}大時化で町近くの納屋や木が吹き倒され、もしかしたら難破船が漂着して一儲けできるのではないかと、獲らぬ狸の皮算用をしていたのだ。このようにして極めて難儀しながら、一路ドーヴァーの岸壁を目指した。埠頭は海に突き出ており、不運にも船が埠頭に激突した。航海長がフランス語で、^げ皆の者難破だ、と叫んだ。私自身も船が軋む大音声と航海長が発した破船の告知を聞き、命を惜しむ者は海に飛び込むべき時だと思った。船酔いが酷かったが、^{かこ}船室から出てマストをちょいと駆け上がり、剣を抜いて振りかざした。ドーヴァーの^{かい}水夫がその合図を認めて、^{げんぞく}櫂が六つの舟（ボート）に乗り込み命がけで我々を救助しに来た。舷側に接するも、危機一髪だった。剣を手にした私が一番乗りして、トマス・ルーシーの名を叫んで、こう言い放った。彼より先に乗り込む奴がいたら、剣で目に物見せてやると。彼の忠実な召使いがこれに応えて、船酔いで半死半生のルーシーを船室から連れ出した。友を腕に抱き介抱し、舟を岸へ進ませた。我々の救助に向かうもう一艘の舟が見えたので、尚更であった。その時、親書を扱うフランスの飛脚が、大胆にも船の頂辺から我らの舟に飛び乗った。着地点が舟の頑丈な木材の上だったのが幸いした。もし厚板の上でなければ、舟板を突き抜け沈没の憂き目に遭ったに相違ない。幸い我らふたりと一緒に上陸した。告白せねばならぬが、水夫が抱いた思いと同様、飛脚の無謀な試みゆえに、奴を抹殺してやろうと考えた。しかし、実行に移さなくてよかった、何ら害もなく一同上陸して命拾いをしたのだから。岸に上がり、舟を何艘も派遣し、船に残っている人と馬を助け出す手だてを講じた。船は全体が壊れ難船し、航海長を気の毒に思い、その損出にルーシーと併せて三十ポンドを与えた。けれど、船の損傷は思ったほど甚大ではなく、潮が引くと長は壊れた箇所を修復した。

ロンドンへ帰り宮中に参内した。陛下の御手に接吻をしてから、フランスの現状を

逐一報告した。コンティ親王妃から預かった贈り物をアン王妃に献上するのに、拝謁を願い出た。直接手渡すのも無礼だと思い、侍女のひとりに託したが、王妃殿下はそれに満足されず出頭するように命じられた。公爵夫人とフランス宮廷について様々に質問をされ、いずれ詳らかに伺いたいと仰せになった。その目的で、何度か王妃殿下に伺候するよう命ぜられ、返礼の品は何が良いかなど相談を承った。

とはいえ、何週間もしないうちに妻子の許に帰った。しばらく家族と時を過ごした。時に学問に専念し、時に軍馬に乗るなどして。立派な装備の厩舎も建てた。フランスから連れ帰った小馬ほど可愛いやつはない。小馬の私に対する愛情も深く、もともと気性は荒いが、私以外だれも乗せようとしないうし、私が跨っている時はだれも寄せ付けないほどであった。小馬の勇姿は、屋敷の礼拝室に掲げた私の肖像画（鞍上の絵）〔所在不明〕で観ることができる。ラテン語で銘を添えた。

最高善よ、小生を善の亀鑑になし給え。

自分自身でも、傲慢不遜を償うゆえに。

その小馬は私が厩舎に行くときすぐ嘶き^{いなな}、さらに近づくと手を嘗める。好き勝手にさせると頬まで嘗めるが、それでいて後ろ肢のかかとははだれひとりとして近づけさせない。この小馬を譲ってくれるなら二百ポンド出してもよいと、サー・トマス・ルーシーにしつこく拝み倒された。その金子を受け取る気は毛頭なかったが、低地帯への出征に先立ち譲った。だが、ほどなくして落命した。私が低地帯に征く契機となった事情はこうだ。クレーヴズ・ジュリアーズ〔クレーフェ＝ユーリヒ〕連合公国および低地帯と神聖ローマ帝国の間にある諸州の継承権をめぐり、その公位を要求する者たちの間で紛争が巻き起こり、フランス王自身が大軍を率いてその地域に進軍するとの風説を耳にしたからだ⁽³⁵⁾。時はキリスト紀元一六一〇年、チャンドス卿と私は低地帯へ船で渡り、そこからジュリアーズに入る意を固めた。そのジュリアーズの都市^{まき}をオレンジ公〔オラニエ公マウリッツ〕が包囲することになった⁽³⁶⁾。大急ぎで行ってみると、攻囲は始まったばかりで、低地帯軍はサー・エドワード・セシル麾下四千名のイギリス兵で補強されていた。ほどなく〔一六一〇年五月十四日〕、仏王アンリ四世が悪党ラヴァイヤックに暗殺され、その名代としてフランス陸軍元帥〔クロード・〕ラ・シャトルが大軍を率いて到着。その陸軍に、因縁のバラニー殿が大佐として着任した。

チャンドス卿はサー・ホレス・ヴィアの陣営に投宿し、私はサー・エドワード・セシルの陣営に同宿した。セシル閣下の隣に小屋を建て、昼夜を問わず塹壕に通った。我らイギリス軍が片方から、フランス軍がもう一方から、敵地に通じる塹壕を掘っていた。敵の要塞は、水を湛えた深い壕に囲まれており、しかもキリスト教界で難

攻不落で最強と噂されるほどで、我が軍の戦列が城砦の防塁まで掘り進めるのは、至難の業だった。敵地に通じる塹壕を掘るに際して多くの人命が失われた。というのも、城砦の都市には、大砲や鉄砲が十分に装備され、市民のほか約四千名の守備隊に護られていたから。セシルは坐して待つタイプの将軍ではなく、包囲中何度も、夜半に自ら前衛を捕らえようとしたものだった。その目的で常に私を同行させたが、お蔭でふたりして何度も身を危険に晒した。第一の歩哨が第二の歩哨に、また第二の歩哨が第三の歩哨に交代するとき、通常我らに向けて弾を三発撃ち込む。弾を撃つ前には為す術なしだが、発射の後には、敵の番兵のすぐそばまで奴らを剣で追い回した。前衛を追いかける際、かなりスリルを味わった。

ある日、セシルと私は、バラニー殿が敵の胸壁や稜堡を目指して掘っていた塹壕を訪れた。バラニー殿が、セシルとフランス軍のお歴々を前にして、フランス語で宣わった。貴殿らはイギリスで最強の勇者と誉れが高い。吾こそはバラニー。どっちが強いか肝試しをしようではないかと。名乗りを上げるとすぐ、奴は塹壕から跳び出し剣を抜いて躍り出た。私も負けじ魂で、すぐさま同様に、後を追って出た。しばらくふたりで腕競べをしていたら、敵兵に見つかり、胸壁と幕壁から三、四百の砲撃を雨霰と見舞われた。ふたりとも先を競って逃げ出したのは、跳びだした塹壕と我らめがけて、これらすべての弾が集中砲火されたからである。バラニーが砲弾の嵐を見て、ここは攻撃が激しすぎるな、とフランス語で言った。フランス語で答えてやった、お前が先に逃げろ、でなければ俺は梃子でも動かぬと。すぐさま彼が全速力で幾分か腰を曲げ身をかがめながら退却。私は背筋を伸ばし悠然と後を追いつつ塹壕にもぐり込めたものの、胸壁や幕壁で弾薬の再装填が済むまでのことであった。この一悶着が後にオレンジ公の知るところとなり、バラニーのとんだ空威張りで、ふたりとも無駄に命を落とすところであったと漏らされた。

包囲中で睜目に値する武勲の数々を挙げ連ねてもよいが、虚飾に花を添えるのは控えよう。ただひとつだけで十分である。攻撃を加える各国の中で、城砦を取り囲む濠を渡り、城壁に真っ先に突入したのは、何を隠そうこの私である。このことは、文学修士で軍人のウィリアム・クロスが書き、低地帯史として出版されている。

この包囲の最中、私とウォルデン卿 [シオフィラス・ハワード] との間で、個人的なめ事が生じた。卿は、当時の大蔵卿サフォーク伯 [トマス・ハワード] の嫡男で、その名家には尊敬の念を深く抱いており、あまり筆は進まないものの、痛くもない腹を探られるのもいやで、ここに真実を記す。卿はサー・ホレース・ヴィア陣営の宴会に招かれていた。私は(オランダ風に)底抜けに呑み、ほどなくしてセシル陣営に戻った。その時、卿に些細なことで陽気に話しかけたのがいけなかった。卿は素面ならあり得ないほどその場の戯れ言に腹を立て、私に狙いを定め猛烈に攻めてきた。その様子を見て、間合いを詰めた。周りの者たちが警戒し、斬り合いが始まる前に割

って入った。とはいえ、卿が先に手を出したことであり、翌日決闘状を叩きつけた。何か言い分があれば、だれにも邪魔されないとこで落ち合おうではないか、と挑発した。直後、卿のお先棒を担ぐサー・トマス・ペイトンが私の許にやって来て、卿は剣による騎乗での決闘がお望みです、さらに続けて、拙者が卿の介添人を務めますが、お手前にはどなたかいらっしゃいますか、ときた。卿も私もこの地に軍馬を連れてきていません。卿は小生よりも強い馬を借りられるでしょう。でも、場所が定まれば、直ちに騎乗か徒歩かを問わず、その場に必ず出向きますと決意を述べた。その後、ふたりで森のはずれまで驢馬〔去勢馬〕で行くと、ペイトンがこう切り出した、卿は舞台をここと決められています。時は、翌朝夜明けにと。それに答えて、今乗っている驚馬より強靱な馬を得られるかは解りませぬが、刻限と場所を違えることはありません。介添人については、卿の腰巾着である貴殿を信頼して、尋常の勝負を見届けてもらいましょうと。それでもペイトンは介添人に拘った。頼れる者として他になく、軍の友に漏らすと、私闘自体が露見し横槍が入るのではないかと怖れます、と断った。

ペイトンが立ち去って間もなく、夜の帳が降りた。夜の間に、見事な櫛の木陰で休もうと思った。もう一本の木に馬を手綱で繋ぎ止め、うつらうつらして二時間も経たぬ間に人気のない森で思いのほか近くで焚火が上がった。すぐさま好奇心に駆られ、その訳を探りに馬に跨った。さほど駒を進めない内に兵士の話し声が聞こえ、スコットランド陣営であることが解った。厩に使いそうな駿馬を見つけ、適当な金額で買えないものかと持ちかけた。兵卒の返事では、大尉サー・ジェームズ・アースキンの持ち馬であるという。大尉殿にお取り次ぎを申し出ると、不在であるとの由。それで中尉に面会を求めると、ありがたいことに兵卒が連れて来てくれた。中尉の名はモントゴメリーで、名だたる豪勇の士であった。先ほど見かけました駿馬を、できますれば買わせて頂きたいのですが、と願い出た。ここに売り物の馬はない、とにべもなく断られた。一日か二日お借りできれば、担保に金貨百枚をお預けします。馬を無傷でお返しできれば、保証金を戻して頂き、その代わりに感謝の印として贈り物を進ぜましょうと交渉した。

モントゴメリー中尉は、私とは面識がなかったが、隠密裡の私闘に軍馬が必要であろうと察してくれた。どなた様であろうと、名のある御仁とお見受け致しました。厩の駿馬をご自由にお使い下さい。もし、決闘で介添人が必要であれば、某がもう一頭の馬に乗り、貴殿にお供いたしましょう。介添人を務めるという条件なら、軍馬の質は不要です。介添人は付けません。駿馬の担保に、是非とも手持ちの金貨百枚をお納め下さい。すぐに私の消息が伝わりましょう。介添人の申し出をお断りいたしますが、終生そのご恩に感謝いたします。そう言い終わるとすぐ、金子の入った巾着を渡し、驚馬から駿馬に鞍替えした。

このような次第で、夜更けの十二時頃、もといた森まで駒を進めてから、馬を降り朝まで休息を取った。夜が白々と明け、鞍上でウォルデン卿とその介添人を待ち受けた。最初に現れた人物は歩兵で、後で聞いた話では、ウォルデン卿のお方様が遣わせたという。歩兵は私を見るなり一目散に逃げ帰った。後を追うかと思ったが、思い直してその場に止どまった。約二時間後、[アイルランドの] マンスター地方の現長官サー・ウィリアム・セントレジャーが到着。長官の話によると、私がここにいる理由は解っている。ことが露見したのは、ウォルデン卿が朝まだきより床を離れ、それでペイトンを介添人に決闘する気であるという疑惑が持ち上がり、長官が事実を確かめに出向いてきたという。さらに、我らの決闘を阻止すべく、三、四十人やってくるらしい。話が終わるか終らないうちに、大勢現れて説得し始めた。決闘禁止だ。そのために拙者らが派遣された。ここで待っても無益であると。言い終わると、ウォルデン卿を捜しに立ち去った。それから二時間しびれを切らすものの、さらに大勢やって来たので、スコットランド陣営に出向き軍馬を返した。モントゴメリー中尉からお金と驚馬を受け取り、フランス陣営に引き返し、ウォルデン卿にもう一度改めて決闘状を送る機会が到来するまで身を潜めた。

フランス陣営に戻るとバラニー殿の虚勢が思い出され、^{きゃつ}彼奴の許を訪れた。おぬしが臆病なことは解っている。さきごろ塹壕で出くわしたとき、手合せを申し出たな。そのお返しにもう一勝負、挑戦を受けてみろ。聞くところによると、おぬしには美しい意中の夫人がいて、その御方から貰ったスカーフを身に着けているそうだな。貴様より俺の方がもっと素晴らしい御夫人がいるぞ。俺はその御方のためなら、おぬしや他の奴ら以上に、たとえ火の中水の底、命だって賭してもよいと断言する。バラニーは焚き付けられても、浮かれた容子でこちらに顔を向け、どっちが思い姫に仕えるのに相応しいかを決めたいなら、ふたりして遊女を抱き、お勤めがよくできる方を勇者としようではないか、とふざけた提案をしてはぐらかした。さらに奴としては、戦意喪失であると。奴を蔑むような目で見て、騎士というより女たらしの口振りだなど、愚弄した。挑発に乗ってこず、駒を進めてモンモランシー一派に属する先述〔後述の誤り〕の騎士テラン殿に会いに行った。テラン殿が言うには、もうひとり別の人物と決闘をするという。それを聞き、テラン殿の介添人を買って出た。けれど、もうすでに人選が済んでおり、仕方なくイギリス陣営に戻り、ウォルデン卿に決闘状を送る時機を窺った。陣営に着くとすぐ、サー・トマス・サマセット〔王璽尚書ウスター伯エドワードの三男〕が本営に十一か十二人を従えていた。中隊を編成中だった。鞍上の私に馬丁がひとりしか仕えていないのを見て、ウォルデン卿との私闘のことで侮辱的な言葉を発した。すぐさま馬を降り馬丁に預け、剣を抜いた。斬りかかってくるのを見るやいなや、相手も供の者と剣を抜いた。奴の仲間が間に割って入ったので、敵の突きを躲しながらサマセットをひたすら目指した。奴の突きを躲し確かに捕らえたか

に思えたが、その瞬間、中尉のプリチャードが私の肩を掴み、脇に押しやった。再度やり直して奴の許に走り寄った。奴はその状況を察して、一同の者と近くの天幕に難を逃れた。ただ、プロジャーという人物と何人かに、^{ふか}深傷ではないにしても手傷を負わせてやった。しかし、奴ら全員天幕に隠れてしまい、致し方なく馬に戻った。私が蒙った損傷といえば、脇腹にちょっとした怪我とふたつの突きであり、一方は胴衣の裾を突き抜けており、もう一方は半ズボンをやはり貫通していた。それに刀身と柄に併せて約十八箇所^{はこぼ}に及ぶ刃毀れと刻み目があった。それで、味方がいるジュリアーズの城砦前の塹壕に帰った。

それからほどなく、[一六一〇年八月二二日]ジュリアーズの都市が降服し、各々帰り支度を始めた。私も人を遣わせ、再度ウォルデン卿に一戦交えるよう求めた。今度は卿が、あまり巧いやり方とは言えないが、(現ホランド伯爵、サー・ヘンリー・リッチの説得に反して)取り消した。

サー・エドワード・セシル閣下に別れを告げ本国に帰る途上、デュッセルドルフまで足を延ばそうと思った。宿営に戻って二時間も経たないうちに、ハミルトンと名乗る中尉が、(同様にまだ都市にいた)サー・ジェイムズ・アースキン大尉からといって、私宛てに手紙を携えてきた。手紙の趣旨はこうだ。モントゴメリー中尉の話によると、小生は大尉の軍馬を借りる承諾を得たというが、その虚偽の申告に関してふたつの内どちらかを選べとの仰せである。つまり、前言を取り消すか(大尉の胸の内では、撤回はあり得ないらしい)、あるいは、もしそうだと言い張るのであれば、日取りを決めて決闘をせよと。この案件ですべきことをしばらく考えた上で、出した答えをハミルトン中尉に伝えた。提案のうちで騎士に相応しい方、決闘を選ぶと。実はその時、承諾を得たのではなく違う条件で拝借した、と事実を説明して誤解を解く方が簡単であったが。それでハミルトン中尉に剣の長さを測らせたあと、この件を一刻も早く済ませるべく、日時と場所が決まり次第すぐにでも決闘する旨を伝えた。ハミルトン中尉が返答を携えて帰る途中、(天の如何なる配剤か判らないが、奇遇にも)四辻でモントゴメリー中尉に鉢合わせした。ジュリアーズ包囲中に負傷した傷痍軍人を都市に連れ帰り、宿営して外科的処置を講じる手はずであるという。ハミルトンはモントゴメリーを呼んで、大尉の手紙の趣旨と私の返事を明かした。モントゴメリーがそれを聞くとすぐ、(ハミルトンが後に語ったところによると)もうひとりの中尉ハミルトンに釈明した。あの御仁なら反論するより決闘を選ぶでしょう。でも拙者の吐いた嘘でどちらか一方の命を危険に晒す訳には行きません。目的地で馬から降りたらすぐにでも、拙者から大尉殿に事情をご説明いたしましょうと。モントゴメリー中尉は、先述のとおり、馬の貸し借りの経緯をアースキン大尉に報告し、大尉も即座に諒承。即刻、ハミルトン中尉を私の処に遣わし、以下のように詫びを入れた。これ以上もう何も言うことはないが、モントゴメリー中尉は極めて忠実な部下であり、貴君を

あのように問い質して申し訳ないと。

雑務に追われて、なかなかデュッセルドルフへ発てなかった。翌日、モントゴメリー中尉が訪ねてきた。今の職を失う可能性が高く、オレンジ公に復職できるよう執り成してくれと頼まれた。でなければ破滅だという。復職できるよう尽力しよう、できなければ道連れとして、前職に劣らず立派な地位・役職に就けるまで金銭的に援助しようと言った。中尉は私の申し出に感謝したが、まずは私の推薦状を携えてオレンジ公に取り次ぎを求めた。そのあと、念願叶って召し抱えられた。

これに片が付くと、舟に乗りライン川を上って低地帯に入った。すこし逗留したあと、アントワープとブリュッセルに到着。しばらくその宮廷で時を過ごしてから、カレーに赴き船でドーヴァーを渡りロンドンに帰った。二日と経たないうちに、枢密院から使者が来て、ウォルデン卿との諍いにけりが付いたことが判った。そして今では、自惚れる訳ではないが、宮廷や市井の人々から一目置かれる存在となり、それまで付き合いのなかった者から引張り風になった。ドーセット伯爵リチャード〔・サックヴィル；令夫人はレディ・アン・クリフォード〕もこれまで面識がなかったが、ある日ドーセット・ハウス〔フリート街〕に招かれた⁽³⁷⁾。廊下^{ギャラリー}の間に案内され、名画をたくさん見せてもらった。最後に緑のタフタ織りが懸けられた額縁を前にして、絵に描かれた人物はどなたでしょう、と尋ねられた。問うてすぐ帷^{カーテン}を引くと、私の似姿が現れた。どのような経緯で私の肖像画を手に入れられたのですかと訊くと、貴殿の武勇伝を数々伺いましてね。ラーキンとかいう画家に描かせた肖像画の模写だという。原画は低地帯に向け発つ前に、サー・トマス・ルーシーに贈ったものだ〔現存〕。ドーセット伯だけではなく、名を伏せて然るべき高貴な御方まで模写を手に入れ、私室に飾られたという（なぜそのようなことになったのか、その訳は知る由もないが）。御方の死後、その絵を観た方々により、思いのほか噂が立った。正直に言うと、肖像画を描かせて、口外できない数多の理由のため、命を狙われる破目になった。

私の肖像画を入手した貴夫人が、もうひとりいる。サー・ジョン・エアーズのお内儀で、ラーキンから先の模写を入手する策を練った。ブラックフライアーズの画家アイザック〔・オリヴァー〕氏に渡し、細密画を描かせたのだ。出来上がると、金のペンダントに嵌め込み^{ほうろう}珧瑯を施した上で、鎖を長くして胸の谷間に隠したという。思うに、それがジョン・エアーズの知るところとなり、必要以上に嫉妬の炎を燃え上がらせた。私は潔白で、その夫婦に恥をかかせるようなことは何も求めてないと、知ってもらいたかった。奥方が私の絵図を所持しているとは想像だにしてなかったし、度を越した愛情を抱いているとは知る由もなかった。なるほど、奥方は宮廷ではある程度の地位で、アン王妃に仕え、その上才気煥発であることから判るとおり、それなりの要人である。だが、ふたりの間に通常の礼儀を逸するものはほとんどないに等しく、ただ白状すると、私が傍らにいる時は愛想よく迎え入れられる男は他にないのは

事実である。よって、申し開きをしておく。

ある日、お方様の寝室に伺ったとき、寝台の帷越し^{とぼり}に令夫人が臥せておられるのが見えた。一方の手には蠟燭、もう一方の手には先述の細密画を持っておられた。幾分大胆に近寄ってみると、燭火を吹き消し、絵を隠した。それで手に何を持っているのか知りたくなり、再度蠟燭に火を点させると、その灯りに照らされて、並々ならぬ情熱を込めた眼差しで見つめていたものは、私の似姿であることが解った。この件は省いてもよかったのだが、やがて起こる流血事件の発端であるから割愛はできぬ。しかしながら、久遠の神の御前で、令夫人の汚名を晴らさなくてはならぬ。ところでその頃、いとやんごとなき御方〔アン王妃〕から、何度か伝令が来てその女官に侍するようにとのこと。王妃殿下の呼び出しには応じたものの、(そのことは神もご存知のはず)王妃殿下のご不興を蒙ることなく、頃合いを見て要請を断った。そうしたのは、ただ単に節操の理由があったばかりではなく、だれ人も引き裂くことのできない、私とある貴夫人との愛情のためであった。(その女性は当代随一の美貌の持ち主であると思う)ロンドンでそれほど長く過ごさないうちに、激しい熱病に襲われた。落命の可能性を秘めていたが、徐々に回復した。このような次第で病が治ると、ライル卿〔ロバート・シドニー；サー・フィリップ・シドニーの弟〕(後のレスター伯爵)が言葉をかけてくれた。サー・ジョン・エアーズが寝込みを襲う計画で、寝室と人前では護衛を付けた方がよいと。同じことを、ベドフォード伯爵夫人ルーシー〔ジョン・ダンなど文人の庇護者〕、そしてその直後にレディ・ホビー〔サー・エドワード・ホビーの二番目の妻か〕からも忠告された。それで、サー・ウィリアム・ハーバート(現ポウイス卿)をお願いして、エアーズに面会のうえ言伝を頼んだ。お偉方から寄せられた情報に酷く困惑しております。原因に思い当たる節がありません。ですが、話があると仰せなら、己の脚で立てるようになりましたら、すぐにでも会いに行きますから、卑怯な手段に頼るのは止めて頂きたいと。サー・ウィリアムが持ち帰った返答は、曖昧で怪しいものだった。エアーズの目論見が何であれ、はっきりと明かす意図がなかったようだ。後に判明したところによると、如何なる手を用いても私を闇に葬る計略であったらしい。というのは、彼の言い分によると、事実無根であるが、私が彼の妻女を寝取ったからだという。だが、私を襲う手だてを見出せず、次の趣旨の書状を送りつけてきた。無事に帰してやるから、どこかで落ち合おうと。当方の返事はこうだ。同じ条件で決闘したいというのであれば、闘う場所をお知らせください。闇討ちを仕掛けないと保証するのであれば、決闘に応じましょう。ただその時、理由を明確に提示することが条件です。暗殺が取り沙汰されていますから、それ以外の条件では御免を蒙ると。

この後、エアーズは人倫に悖る行為で闇討ちを喰らわせようと苦心惨憺したものの、その甲斐もなく次のやり方で私を亡き者にする決意を固めた。私は馬丁をふたり

連れてホワイトホールに出向くことになっていた。それを聞きつけたエアーズは、ストランド街方面から行くと、ホワイトホール手前にあるスコットランド・ヤードと呼ばれるところで、武装した四名の手下と待ち伏せた。ホワイトホールの大門まで馬で行く途中、暗殺未遂現場にさしかかると、奴が剣と短剣を持ち血眼になって私をめがけ突進して来た。それも、ほんの少しの警告も与えられず、虚を衝かれた。けれど、私ではなく馬に狙いを定め、その胸部を骨に達するまでずぶりと剣を刺し込んだ。馬はギョッとして脇に寄ったが、それでもしつこく馬の肩を突いた。その突きで馬は腰砕けとなり、お蔭で剣を抜く隙ができた。奴の手下どもが私を取り囲み、馬にさらに三箇所も傷を負わせた。このため馬は暴れだし蹴りを喰らわせ、手下は近寄れなくなった。この機に乗じ、全力でエアーズに打撃を試みた、奴は剣と短剣で攻撃を躲した。奴に手傷も負わせられず、かえって柄から約三十センチのところで剣が折れた。馬が何箇所も刺され血を流し、寄って集^{たか}ってひとりを攻撃し、しかも襲われた側の剣が刃毀れするなど、この騒動を見ていた野次馬で私を知る人が、何度も私に向かって叫んだ、逃げろ、さあ早くと。如何なる用語で呼ぼうと、退却は卑怯と軽蔑しており、その場を去らず悠然と馬から降りた。片足を地に付けるとすぐ、つけ回していたエアーズがまた馬を刺したので、降りた側に馬が倒れ、私も地面に倒れ込んだ。片足に鎧をはき、折れた剣を右手に持ったままだった。好機と見たエアーズは馬まで走り寄り、剣で私を突き刺そうとしたが、この危機に際して、両腕を奴の脚まで伸ばしこちらに引き寄せ、奴を仰向けに頭から引き倒してやった。馬丁のひとり（シュロップシア出身の少年）が私の足を鎧から外した。もうひとは木偶の坊で、最初の一撃を見た途端、逃げ去った。これでようやく両足を大地につけ、最高の攻撃体勢が整ったが、手にしていたのは、哀れ武器の残骸でしかなかった。エアーズも身構え、ホワイトホールの壁と私の間に立っていた。少なくとも一族郎党を二、三十人は連れて、それもサフォーク伯爵 [ウォルデンのハワード卿の父トマス] の従者と一緒だった。このように私に敵対する大勢の輩がいたが、正直なところ、エアーズと手下の他はどれも抜き身の剣を持っていないのを観て、果敢にエアーズの許に突進した。だが、奴は私の剣に切っ先がないのを承知しており、突きではなく振りかざしてくると思っただけで、剣と短剣を頭上に掲げた。その構えを見てすぐ、奴の胸のど真ん中に突きをまともに喰らわせてやった。満身の力を込めてお見舞いし、後頭部から地面に倒れ踵^{かかと}が宙に舞った。このあり様を見て、奴の手下が攻撃を仕掛けてきた。まさにその時、グラモガンシアの郷紳マンセル氏が、多勢に無勢の非道を見咎め助太刀を買って出た。つまり、判官鼻頂で奴の手下をひとり食い止めてくれた。スコットランドの郷紳も、もうひとりの手下と斬り合いを始め、蹴散らした。残るふたりの手下に私ができることと言えば、奴らの突きを躲すだけで、できるだけ間合いを保つようにした。だが、それより他に身の安全を確保する手段がないと考え直し、接近戦に持ち込むべく突撃

すると、エアーズがやおら身構えること三度目だった。奴の突きを左手で受け流し、奴との間合いを詰めると、右脇腹を短剣で刺された。短剣は肋骨を下り遙か腰まで達した。その痛みを感じた瞬間、右肘で奴の動きを封じ込め、それとともに右脇腹の上部に深く刺さった短剣の柄を握った奴の手を払い除けた。短剣は突き刺さったままであった。サー・ヘンリー・ケアリー（後にフォークランドとアイルランドの貴族に叙せられる）がその無惨な姿を見て、抜き去ってくれた。この間に、取っ組み合いをしていたエアーズの頭に傷を負わせ、三度目になるが奴を投げ飛ばした。地面に跪き馬乗りになって、渾身の力を振り絞り剣の残骸で奴を打擲した。その結果、四箇所にあぶ損傷を与え、奴の左手は切断寸前であった。ふたりの手下はこの間、私に攻撃を仕掛けてきたが、神の思し召しか、奇蹟的に命拾いをした。エアーズに止めを刺そうと剣を振り上げると、手下が攻撃を再開し、六度も払い除けることになった。奴の身内は、エアーズが私から受けた深手が致命傷になるのを恐れ、奴の頭と肩を掴まえ、私の股間またぐらから引きずり出すと、ホワイトホールまで運んで行き、浮棧橋で舟に乗せた。サー・ハーバート・クロフトから後で聞いた話によると、エアーズは舟上でずっと吐き続けていたという。思うに、奴に喰らわせた最初の一撃が功を奏したのであろう。奴の配下や兄弟それに親族もその場を立ち去り、今や私は鬪いの場を治める支配者であり勝利者となった。手始めに奴から短剣をもぎ取り、次ぎに奴の手から剣を叩き落としたのであるから。

この刃傷沙汰にけりが付くと、ストランド街の親戚の館に退き、外科医を呼んだ。右脇腹を診てもらおうと、致命傷ではなく、全治約十日との見立て。その間に、国の名だたる方々から、訪問と激励を頂戴した。傷がすっかり癒えると、サー・ロバート・ハーレー [遠戚でオクスフォードの学友、後の造幣局長] にエアーズの屋敷を訪れ伝言を依頼した。あなた様におかれましては、名誉は残り少なく、その僅かながらの名誉すら如何様にも腐くたすことも可能かと存じますが、雌雄を決する果たし状を捧げます。奴の返答によると、妻を寝取られた仕返しに、窓からマスカット銃で狙撃するという。

枢密院は、まず私から剣の提出を求めた。襲われたとき、巷で流布する撃退法が俄に信じ難く、残骸を見たかっらしい。次ぎに両者に呼び出し状を出した。私は故意に欠席し、ハンフリー・ヒルという人物に尋常の果たし状を持たせた。エアーズが受け取りを拒み、ヒルは決闘状を剣の切っ先に吊し、奴とその場に居合わせた連中の面前で落とした。

枢密院はエアーズの逮捕状を出した。私には構いなしの評定が下り、お上の呼び出しに応じることにした。エアーズが至る所で触れ回った真相によると、嫉妬とそれに起因する襲撃の根拠は妻の自白だという。夫人は、私への嫌疑を晴らし、また自身の体面を保つため、叔母のレディ・クルックに以下の趣旨ふみで文を送った。夫エアーズは

嘘八百を並べています。^{わらわ}妾は不義密通を働いたことはありません。妾が白状したというのは、まるで出鱈目。というのも、妾はその様なことを言った覚えは一切ありませんから。

レディ・クルックは絶妙のタイミングで、この書状を届けてくれた。枢密院の審問会に出向く矢先のことだった。宿敵エアーズは、枢密院で私を襲った理由について取り調べを受けたとき、あくまでも妻の自白に固執した。奴が退室し、私が呼ばれた。その時、レノックス公爵 [ルドヴィック・ステュアート] (後のリッチモンド公爵) が情報を提供してくれた。奴の襲撃の根拠は妻の自白だけで、それ以外何もないと。件の文に目を通してもらうため、この書状が審問会に応じる直前に届いた旨を公爵に伝えた。並み居るお歴々の前で、枢密院の廷吏が読み上げた。公爵が言うには、エアーズはこの世で最も哀れな奴だな。妻の文が証拠だが、その妻に嘘つき呼ばわりされた揚げ句、姑息なやり方で襲撃したため父親からも勘当されてしまうとは。後で解ったことだが、廃嫡は事実であった。報復については、獅子奮迅の闘いで奴に負わせた傷で満足しておこう。私の言い分も概ね受け入れられ、証人も大勢いる。このような次第で、公爵から命じられた。私闘のことでは、奴に決闘状を送ってはならぬ、また如何なる通知書も金輪際受け取ってはならぬと。その命令は守っている。とはいえ、次の騒動を割愛はできぬ。数年後、エアーズはアイルランドから戻り、当時私が滞在していた [アングルシー島の] ビューマリス界隈にやって来た。私の従者と取り巻きが奴の家に押し込み、八つ裂きにしそうな気配であった。その報せを受けすぐさま跳んで行き、一同を撤退させた上で、奴に言ってやった。以前の卑怯な奇襲は堪忍ならぬが、赦してやるから町を出て行けと。後から聞いた話では、武士の情けに心から感謝したそうだ。

約一ヵ月後、エアーズによる襲撃の速報が、私にもどのような経緯かよく判らないが、モンモランシー公爵に伝わるところとなった。公爵はすぐさま、私宛の手紙を持たせ、人を遣わせた。今も保管しているが、心温まる要請が記されている。翁の許に来る気があれば、息子として迎えようと。遣いの者は、イギリスにこの為にだけやって来たという。また、この使者から聞いた話では、私を敵だと公言する輩が大勢いて、しかもその輩は雲上人ときている。事実そのとおりである。したがって、そのことで禍を招き後の祭りにならなければよい、と懸念されているという。

書簡を認めた。使者を遣わせて下さり、心より感謝申し上げます。敵対者の数が如何に多く、彼らの身分が如何に高くとも、私を無理やり国から追い出すことはできません。しかし、時にいざ鎌倉となりますれば、必ず馳せ参じますと。誓言を遂行すべく、年明けにもフランス国内で不穏な動きがありそうで、モンモランシー公爵の使者に言伝をお願いした。内乱でご奉公する栄を賜りますれば、私財を^{なげう}擲って百を超える騎兵を連れて参りますと。この約言を老公爵はとてもお喜びになられたらしい。(後

にフランス大使に就任した際、ご令嬢のヴァンタドゥール公爵夫人から伺った話によると)私のことを愛情込めて語らない日は、終生ほぼ一日たりともなかったという。

大立ち回りを演じた一六一一年からその後一六一四年まで、自身のことであまり特筆すべきことはない。ある時は宮廷で(嘘偽りはないが、望む以上にご最良を得られた)、またある時は郷里の村で時を過ごした。でも何ら目立った事件がある訳でもなかった。ただ、ある出来事だけが記憶に新しい。サン・ジュリアンからモントゴメリー城へ行く途上、アバガヴェニーの町でのこと、召使いのリチャード・グリフィスが街外れという訳ではないがアスク川に架かる橋に差しかかり、馬に水飼うことにした。川に分け入ると、なんとそこは水深く流れが急で、人馬ともに流されてしまった。先でその光景を見ていた別の召使いが、ディック [リチャードの愛称] が溺れていると、絶叫した。叫び声を聞くとすぐ、馬に拍車を当てその場に急いだ。見ると(馬もろとも)腰まで水に浸かっており、少し手前で飛び込み泳いで行き、片手で彼を支えながら、やっとのことで川の真ん中、(天の配剤か、運良く)中洲に辿り着いた。休息を取ったあと、来た岸に戻るか、向こう岸に渡るか相談した。泳いで戻れると思うが、もしかしたら向こう側は浅瀬かもしれん、というディックの進言に従い、彼を馬に乗せ先程と同じやり方で支え、川を渡り向こう岸に無事に着いた。その時私が跨っていた馬は、値段はたしか四十ポンドで、後にエアーズがお釈迦にする馬だ。泳ぎが得意で、私を乗せたまま背中を水に浸けずに泳げた。一方、ディックの小さい驚馬は泳ぎが遅く、私の支えがなければ、絶対に溺れていたであろう。

この馬のことで暇に焼き付いて忘れられない出来事が、もう一つある。もとは、田舎の豪農で親戚のファウラーから譲り受けた馬だった。コールブルック [コールドブルック] の町からそう遠くない所で橋を渡ろうとしていた。その橋は片側に手すりがなく、しかも中央より少し手前に穴が開いていた。馬は元気旺盛だが、この上なく臆病で、右目がよくなかった。穴を見てギョッとし、突然橋の片側に身体半分が縦にはみ出てしまった。このままだと馬の右両肢もろとも川に落ち一巻の終わりかと予見され、鐙をはき拍車をつけた左足を馬の左脇腹にびしゃりと押し当てた。すると馬は跳ね上がり、四本肢でドブンと川に落ちた。三、四回水中でもがいたあと、岸に辿り着いた。

一六一四年の到来も間近に迫り、低地帯軍とスペイン軍とが再び決戦を挑む徴候が現れた。そこで、オレンジ公に伺候を申し出た。温かく迎え入れて下さり、閣下と食卓を囲む以外の食事を禁じられた。午後は差し迫った状況でなければ、ともに余興を楽しむため馬車で出かけた。低地帯軍は準備が整い、オレンジ公も出陣が間近であった。戦場に赴く途上、時には馬車で、時には低地帯の流儀に倣い大型の荷馬車(ワゴン)に同乗してお供をしたが、それがイギリス及びフランス双方の指揮官には羨望的で、彼らもその榮譽に浴することを望んでいた。エメリッヒ [クレーヴズ領内] 近

くに着いたとき、尼僧院から遣いの者が来て、身を低くして懇願した。兵士たちが略奪と陵辱の行為に及びませんよう、なにとぞご高配を賜りたく存じますと。私からも慎んでお願いすると、公は然りと頷いた。だが、己の目で確かめてみたいと仰せになり、公と私とサー・チャールズ・モーガンの三人で尼僧院に視察に出かけると、ひどく荒廃していた。尼僧院に護衛を付け、エメリッヒの都市まで進軍した。降伏の勧めを受け入れた。守備隊を残し、レース [同上領内] まで行軍の意を固めた。この地は、一方に [アンブロジオ・] スピノラ將軍率いるスペイン軍、もう一方に低地帯軍が対峙し、二分する双方の軍に抗えず、いずれの陣営であれ先に到着した側に降伏すると、布告を両陣営に出していた。そこで敵の名将スピノラはオレンジ公閣下に、レースを攻略するつもりなら町外れの平原で一戦交えよう、と伝えて来た。公はなんら驚いた様子もなく行軍させた。これまでどおり、歩兵のため工兵らに^{かきほり}塙壕 [塹壕と盛土] をいくつも造らせてあった。やがて合戦の舞台となる平原のすぐ近くの塙壕に到着、軍勢を配備しスピノラ軍の攻撃に備えられた。私はというと、兵の配置が済むと、スピノラが軍を引き連れいつ現れるのか、今や遅しと待ちわびた。歩兵をひとりだけ連れ、大塙壕を乗り越えた。最初に出会った敵兵と短銃で一、二発ほど撃ち合いをする目論みであった。そうこうする内に、戦場に敵一騎を見付けた。敵は私が近づくと、さらに大勢が後から来るのではないかと危ぶんだのであろう、一目散に駆け出した。戦場の向こうの端まで追ってみても、敵の姿は皆無であった。私が冒険している間に、オレンジ公は^{せっこう}闘いの準備を万端整えると、敵軍が約束を違わず来ているか探るため、斥候を五、六名放っていた。偵察隊は私が近づいてくるのを見て、敵兵と勘違いしたらしい。私にも彼らの様子が見て取れた。彼らがだれなのか皆目見当が付かず、手に剣と短銃を持ち迎え撃とうと近寄った。すると、適当な距離にまで接近したとき、その内のひとりが私に気づき、誤解が解けた。それで公のもとに帰り、抜け駆けの結果、敵の姿無し、と報告した。公は眼前の塙壕を元に戻すように命じ、先陣を切り戦場の中央まで駒を進めた。そこから、町に降参するよう使者を派遣すると、何ら抵抗もせず降伏した。

我が軍は指定の戦場に大急ぎで進軍したため、荷物や食糧は置き去りにした。私には食べ物が何もなく、歩兵がポケットから分け与えてくれた。当夜の宿営は酷いものだった。野原に豪雨で仮設テントもなく、藁を積んだ荷馬車の上段に潜り込めただけでも僥倖だった。精一杯隙間なく外套を身に纏い、嵐を堪え忍んだ。朝になっても敵は現れず、レースの町に赴いたところ、オレンジ公はすでに守備隊を置き、軍の残り^{ヴェーゼル} [ヴェーセル] に向けて行軍していた。それよりも先にスピノラ軍は当地に駐留しており、当方は守備を固めるとともにスピノラの合図を待ち構えた。その他のことについては、このあと数週間、ふたりの名将の間に特筆すべき事件は何も起こらなかった。

この時、オレンジ公閣下より頂戴した特別な鼻壼を省く訳にはいかない。ある兵士が同じ宿营地のもうひとりの兵士を殺害した。赦されぬ罪であり、だれも味方する者はない。その哀れな兵士が私を訪ね、執り成しを頼んだ。同僚の殺害でこれまで放免された者がいるかと尋ねると、否との返事。それでは口利きは無用、と突っぱねた。首を少し傾げながら言うには、命を失うのに較べたら口添えするくらい楽勝でしょうと。凶々しい屁理屈に惻隱の情を催し、閣下の許に急いだ。不憫な兵士のため一言申し上げます。その者になり代わりまして陳情したいと存じます。その場に、サウサンプトン伯爵〔第三代；ヘンリー・リズレー〕とサー・エドワード・セシルとサー・ホレース・ヴィアとシャティヨン殿それにフランス軍の名だたる指揮官が居合わせた。オレンジ公は、一同に向かってフランス語で仰せられた。ご存知のとおり、此奴は天下の豪傑だが、その彼が哀れな一兵卒のために命乞いをするとは、心根の優しい御仁でもあるらしい。これまでこの種の事件で慈悲を試されたことはないが、彼に免じて不問に付してはどうかと。気の毒な奴を連れてこさせ、身の処し方を評議された。お咎めなしの沙汰が下り、晴れて自由の身となった。

季節は晩秋へと移り、両軍ともに駐屯地に戻る退き際かと思われた頃、スペイン軍のラッパ手が挑戦状を携えやって来た。おのおの方、貴軍に思い姫の名誉をかけ一騎討ちを受ける者がいれば、スペインの騎士が相手してやる、それもスペイン陣営の保障付きでと。この挑戦状は早朝に届いたが、十時か十一時になっても受けて立つ者がいなかった。その布告が私の耳に入ると間髪を入れず、オレンジ公を訪ね挑戦に応じる決意を表明した。閣下は私の顔をしげしげと眺め、諭すように言われた。軍歴も長くその経験から解ることだが、この手の挑戦状を頻繁に送り付ける輩には二種類ある。ひとつは、おそらく敵との闘いで名を腐し、一騎討ちによって挽回をはかる手合いである。もうひとつは、我が軍にこの手の運試しの任務を割り当てられる者がいるかどうかを探る手合いである。とはいえ、挑戦に応じる者が立派な人物であれば、その人物に不服を唱える者はなからう。閣下が知る限り、我が軍で即座に名誉を賭して戦えるのは私を除いておるまいと。しかも閣下は、先に名を挙げた並み居るイギリス及びフランスの指揮官を前にして、仰せになったのである。閣下のお許しも出て、スペイン軍にラッパ手を遣り答えてやった。挑戦に応じる者が騎士の面汚しでなければ、所定の舞台で、戦う武器を決め一戦交えようではないかと。ラッパ手がスペイン軍に着くころかと思われたとき、名将スピノラからもうひとりラッパ手がやって来て、先の挑戦は將軍の許可なく為されたもので無効と伝えた。この報せがオレンジ公に告げられたとき、私もその場に居合わせた。閣下が言うには、これは興醒め。挑戦状を送り付けて取り消すとは、訳が分からぬ。閣下の願いを受け、お許し頂ければ、奴らの陣営に殴り込み、連中と同じ様に挑戦状を叩きつけてやりましょう。決闘の舞台についても、こちら側で行なうとすれば、多少とも躊躇う気になるやも知れません

から、敵の陣営で行なうと提案してみましよう。閣下の返答は、説き伏せてこの役目を負わせるのではなく、自らの意思で手を挙げるであれば、どうぞよしなに、であった。オレンジ公に暇乞いをして、勇者サー・ハンフリー・タフトンと馬丁ふたりを連れて、敵地ヴェーゼルに乗り込んだ。途中だれに遮られることなく到着すると、だれに用かと番兵に尋ねられた。ノイブルク侯〔ヴォルフガング・ヴィルヘルム〕にお取り次ぎを求めると、案内された。ノイブルク侯とはジュリアーズ包囲に際して面識があり、私を覚えていてくれた。温かい抱擁が終わると、来た訳を尋ねられた。かくかくしかじかだと答えると、スピノラ將軍に知らせようとだけ仰せられた。スピノラは大勢の指揮官や大尉を引き連れ、ノイブルク侯の天幕にやって来た。入るとすぐ私に向かって言うには、貴君がここに来た訳は解っている。オレンジ公の陣営で決闘するのを禁じた。同じ理由で、我が陣営でもご法度だ。けれど貴君は大歓迎だ。一緒に食事をしようではないかと。他にすべきこともなく、親切な申し出を受け入れた。天幕まで付いていくと、豪勢な料理が食卓を飾っていた。食卓の一方の端にノイブルク侯を、もう一方に私を座らせた。將軍当人はというと下座に坐り、切り分けられた最高の肉を自らの手で振る舞った。イタリア語で尋ねられた⁽³⁵⁾。サー・フランシス・ヴィアは何で死んだのかと。何もすることがなかったからです、とイタリア語で答えた。闘將の命を奪うには十分だな、とスピノラ。実際、偉大な司令官サー・フランシス・ヴィア〔前出ホレース・ヴィアの兄〕は戦時ではなく平時に死んだ⁽³⁹⁾。

《注》

- (35) 一六〇九年三月二十五日、ユーリヒ・クレーフェ公爵領のヨハン・ヴィルヘルムが嫡男の跡継ぎを残さず死去。サリカ法により公位継承者は複数、そのうち有力なブランデンブルク選帝侯ヨハン・ジギスムントとノイブルク侯フィリップ・ルートヴィッヒのふたりが、名乗りを上げる。プロテスタントを支援するためフランス王アンリ四世とネーデルラント連邦共和国が助勢する。それを受けハプスブルク家のレオポルト大公が神聖ローマ帝国皇帝ドルフ二世の諒承を取り付け、公領の主要都市ジュリアーズ（ユーリヒ）を占拠する。イギリスもプロテスタントの大義名分で追随し、新旧宗教紛争の様相を呈する。C.V. Wedgwood, *The Thirty Years War* (1938; rpt. New York: Book of the Month Club, 1995), p. 48 / C・ヴェロニカ・ウェッジウッド『ドイツ三十年戦争』瀬原義夫訳（刀水書房、二〇〇三年）五一頁参照。なお、ユーリヒ包囲の際は、レオポルト大公がプロテスタント同盟の軍門に降り、ブランデンブルク選帝侯とノイブルク侯のふたりの共同統治で一旦は決着がつく。だが、その後、ブランデンブルク選帝侯がルター派からカルヴァン派に転向すると、ノイブルク侯はカルヴァン派からカトリックに改宗。両者の隙を衝きドルフ二世を襲いだマティアスとスペイン王フェリペ三世が名将スピノラをクレーフェに派遣し、一六一四年に紛争が再燃する。ところで、義勇兵としてジュリアーズ包囲に加わったハーバート卿に、ジョン・ダンは、

「ジュリアーズにいるサー・エドワード・ハーバートに」を贈った。その書簡詩で、ダンは卿の活躍をこう評している。「君が以前から口癖のように言っていたこと、つまり、／俺は人間を知っている、という主張は正しくもあり大胆不敵だ。／その主張を信用できると思わせるのは、君があらゆる／名著を読んでいることだ。いや、君自身が一冊の名著だ。／君の行動に、人となりが読み込める。」John Donne, *The Complete English Poems, op. cit.*, pp. 218-19 / 『ジョン・ダン 全詩集』前掲, 三二九-三一頁。

- (36) ここに登場するオレンジ公は、オランダ独立の父オラニエ公ウィレムの二男マウリッツ。異母兄弟の長男フィリップスは長らくスペインに人質として囚われの身であった。「沈黙公」として知られる父の暗殺のあと、ナッサウ・ファン・マウリッツはオランダ総督となり、スペインとの八十年戦争で中心的な役割を担った。また、休戦中も軍事教練を体系化しただけではなく、武器の開発にも力を注いだ。前出の『トリストラム・シャンディ』(上巻, 一九三頁)には、馬車よりも速く走る風力を利用した帆かけ車の発明は、マウリッツの命によるとある。一六一八年、長兄フィリップスが謎の死を遂げたあと、マウリッツがオラニエ公(オレンジ公)の称号を引き継ぐ。C.V. Wedgwood, *William the Silent: William Nassau, Prince of Orange 1553-1584* (1944; rpt. London: Phoenix Press, 2001) / C・ヴェロニカ・ウェッジウッド『オラニエ公ウィレム オランダ独立の父』瀬原義夫訳(文理閣, 二〇〇八年)参照。また、このマウリッツは、一六〇九年、オランダ東インド会社が日本に進出したときのオランダ総督であった。
- (37) 山根「アン・クリフォードとジョージ・ハーバート：ペンブルック伯派閥の中で」『英語英文学研究』第六六号(二〇一〇年三月)所載, 特に六五-六九頁参照。
- (38) スペイン軍の名将スピノラ(あるいはスピノーラ)は、もとイタリア・ジェノヴァ出身の傭兵隊長。オランダ独立戦争におけるオラニエ公の宿敵。一六〇九年から休戦中であったが、スピノラ將軍は、休戦が明ける一六二一年に向けて連合諸州打破の計画を着々と練っていた。ハーバート卿は、休戦中の小紛争で知り合ったスペインの名将に共感を得たようだ。供食の儀式を終えたあとは、親しみを込め軍の役職、將軍ではなく、地位・肩書である侯爵を使っている。
- (39) 一六〇九年八月二八日に死去したサー・フランシス・ヴィアに対し、ハーバート卿は、二編の追悼詩(一編は英語, もう一編はラテン語)を捧げている。Edward Herbert, *The Poems, English and Latin*, ed. G. C. Moore Smith (1923; rpt. New York: AMS Press, 1980), p. 34, p. 88.